

『みずくらんど』との出会いと魅力

杉山 智子

一九四六（昭和二十一年）年に初版がでて以来、長く考古学を志した若者たちの指標となったといわれる藤本栄一氏の『かもしかみち』という書物の一節には、次の言葉があるという。

「物もみせてくれたし、物を並べることも教えてくれた、がしかし、学の本質は要するにナッシングだった。」水田跡、一粒の炭化米すら未発見であった昭和十一年に、土器のセットを手がかりにして日本農耕文化の起源を確信した森本六爾氏の業績を、批判的に意味づけたものである。おもしろい言葉だと感じ、瞬時のうちに胸に刻みつけられた。というのは、自分の世界史の教師としての弱い所を、四方から活路なしの状態で突かれたように思われたからだ。「物もみせてあげないし、物を並べることも教えてあげない、に加えて学の本質も要するにナッシング」だとしたら、世界史の授業はいったいどのような意味があるのだろうか。「学の本質」については、数々の研究所、専門書、論文がほぼ全面的に助けてくれるであろうが、前半部分については、「物」をどのように解釈するかにもよろうし、みせ方、並べ方ともかわり、なかなかたやすくはない。どうすれば「物」と「学」とをほどよく調和させて、教材化できるだろうか。というようなことを考えるきっかけを、つくったと同時に、自信のなさも手伝ってシニカルな言葉として受けとられたもの

でもあった。こうしたつい先頃からの感情をひきずりながら過越しているときに、巡りあわせていただいたのが『みずくらんど』である。

今回はじめてこのような福生市史研究冊子が発行されていることを知り、幾冊か、既刊のものを読ませていただいた。編集、執筆の方々の郷土をいとおしむ心と、埋もれた史実を掘りおこし分析しつくそうとする研究姿勢が、ほとばしりでていて、創刊間もない、春秋に富む冊子らしく清々としたものが余韻として残った。

私は、郷土史とか地方史といった分野のことについて、ほとんど多くを知らないのであるが、たとえばイギリスの地方史研究を例にあげてみると、その成果は大きく二つに区分できるようだ。ひとつは十九世紀前半から地主を中心に、アマチュアの史家が集まって、結成された考古学協会 (archaeological society) と、地方文書の保存と刊行を目的として二十世紀に入ってから創立された州立地方文書館 (record society) からの流れである。歴史好きなお国柄らしく実績もあげている機関のようであるが、いずれにせよ、地方史という視点は比較的新しいものである。そういう意味でも、自分の身のまわりの地域、郷土を、自然、歴史、民俗、文化といった各断面から、切り分け

て分類、整理してみようという作業は、ほんとうに意義深く新しい分野を開拓していく快感と、史料や遺物を渉猟していく楽しさは、また格別のことだろう。多彩な世代、立場の方々によって積みあげられた研究成果は、やがて歴史学という総合の段階へ入っていく。「物」と「学」とが一体化する過程が、地方史や郷土史を研究していく過程において、明晰になっていくのを、このたび程の親しみと好奇心で体験したことはなかった。とても長い間、こうした観点には、好事家的なイメージが強く、素通りの対象であった。

私の最もよく知っている福生市は、福生駅から勤務校までの道程である。この六年程で、駅舎は鉄筋になり、ロータリー正面も、メタルっぽくなったし、幾店かが閉店したり開店をしたり改装をしたりで、美しくなったり通俗的になったりした。生徒たちが学校帰りに、ちょっと立ち寄ることのできるような青少年むけのチェーン店もできた。心なしか朝夕の駅の混雑が増したような気もする。学校周辺の空地が住宅や店舗にかわった。駅前を除けば、がらりとした大きな景観の変化はないものの、少しずつ街の風景がかわっていている。まさにこのような事実もまた「物」として、やがて「みずくらいど」が扱われる研究の対象になり、学問として実を結んでゆくのだろうかと考えてみると、今まで地方史とか郷土史に対しての思い込みが、感覚的な根拠のないものであることを、実感させられる。蒙昧だった箇所ですつと光があたってその形状があらわとなり新鮮である。丹念に史料や、遺跡、遺物にあたりそこから解釈と分析を行う実証的作業が、すぐその、あそこの、という範囲で

きるのも市史研究の醍醐味で、それを積極的に享受なさろうという方々がこんなにもたくさんいらっしゃるということも、驚きであった。それ程の市史とか郷土史とかは、いったいどんなものなのだろうかという気持ちから出発して、既に述べたような印象をもつに至った。率直に申ししまえば、見直してしまったわけなのだ。これはやはり市の一面であるビジネスエリアに対する親しみが強く作用した現象のような気がしている。人間というのは、自分に深くかわる「物」についてはとてもこだわらるし大切にし、よく知りたいと思うものである。したがって過去を知りたい、つまり歴史を学びたいという気持ちは、十人が十人、全員もっている本能であり、要求であるはずだ。

この要求に答えるべく、最も足元から福生市史研究が続けられているのは、将来にわたってこの街を大切に思う人間たちにとって、かけがえない拠り所となると思う。ただ、今現在、一般の小中高生たちが、図書室などの棚から手にとって読みたくなるには、ビジュアル版的、映像的な記事がかなり大量に必要となるのかもしれないと思う。

授業では、遠い異国のことを、時を越え空間をかけぬけ大胆にも、その場その時の同伴者のような面もちで表現し断定もしてしまふ。そうした毎日の中で反芻されていたディレンマとわだかまりは、「物」をみ、並べて何か新しい発見や驚きが生じることによって学習者の立っている位置がプラスに動けば、雲散霧消してしまうものであった。

今後の市史研究と編さん事業の御発展を心からお祈りしております。
(すぎやま・さと) 福生高校教諭